

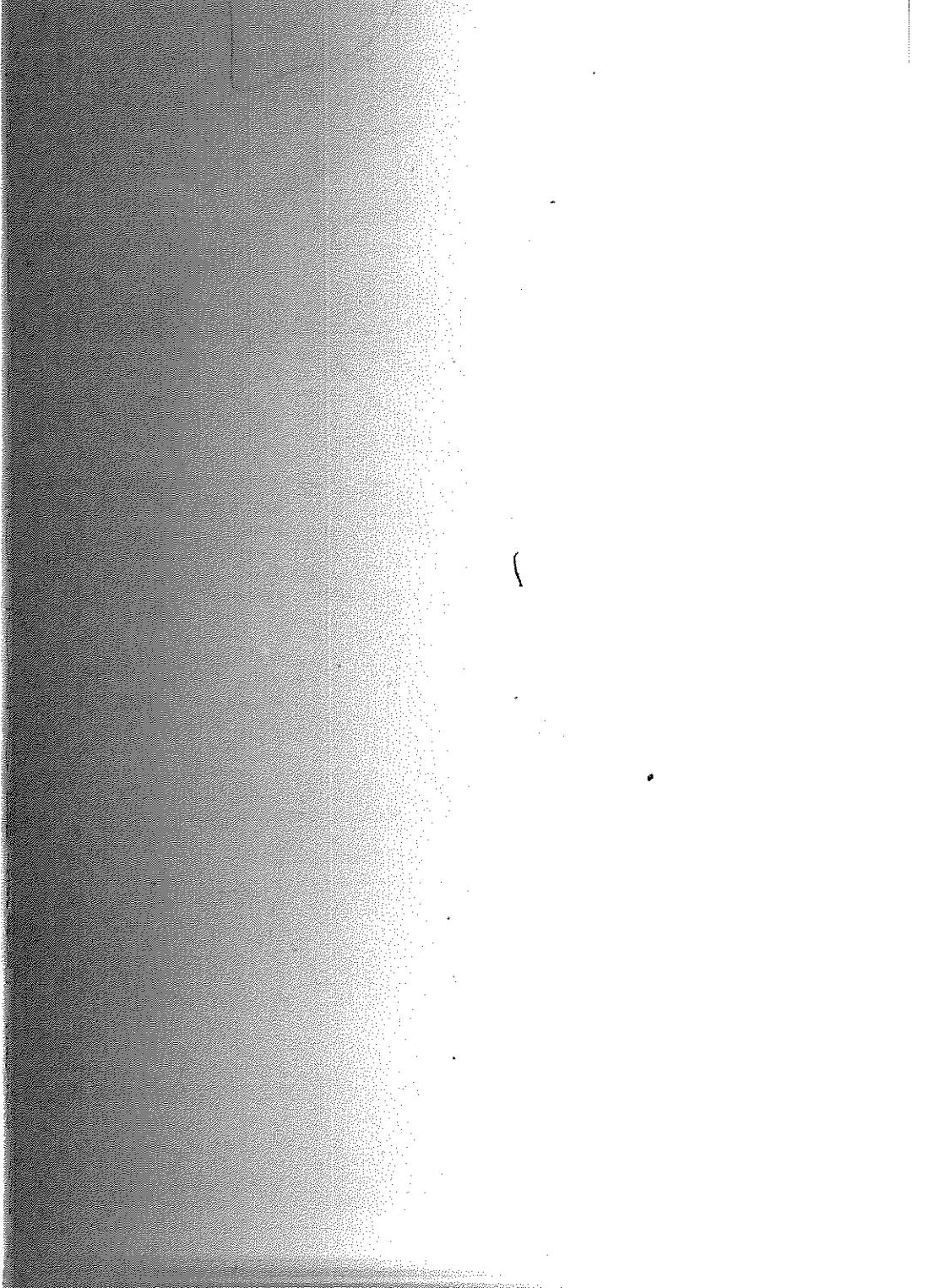
# 文藝春秋

「消費税ゼロ」で日本は甦る

政策論文  
山本太郎

総力特集 2020年の「羅針盤」/わが友 中曾根康弘 渡邊恒雄 新春特別号

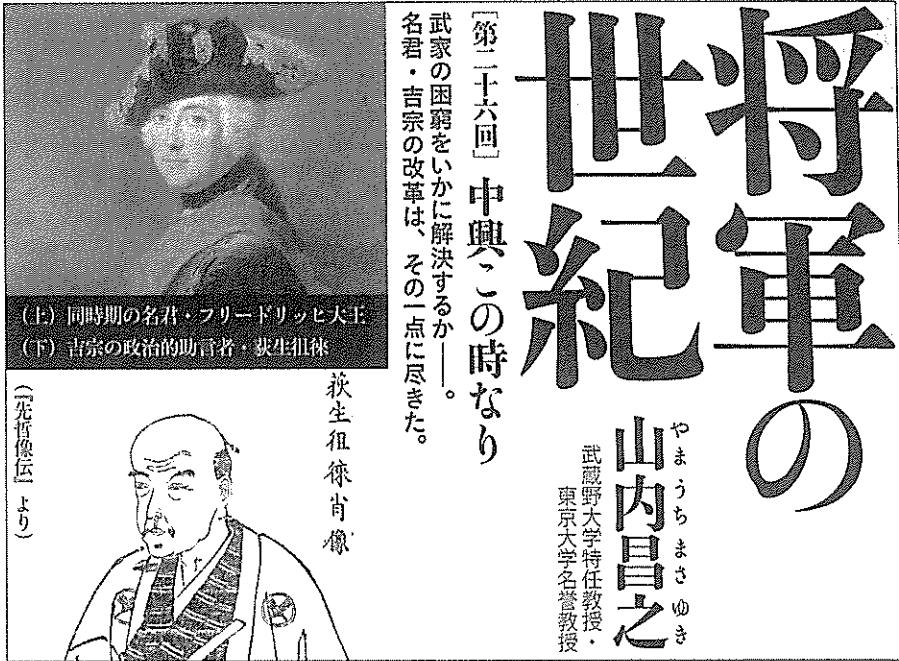
大正十二年一月三十日第三後録良物可  
令和二年二月一日發行(毎月一回)一日發行  
第九十八卷第一号二月十日始



保四年（一七一九）の申維翰の觀察は、どうかするに主君の肅宗やルイ十四世への評価よりも高いと錯覚させるのではないか。『南紀徳川史』（1、巻八）の吉宗描写はまず無難といってよいだろう。「御弱年ノ御時御身ノ長六尺余二足セタマフ凡七百人之中ニ御頭出セタマフ（中略）御力抜群ニ勝レサセタマエ御威望嚴然トシテ挾スル者畏怖セサルナシ。麻面色黒ニマシマセトモ御生質柔和ニ御座ナサレ候故小兒馴昵ミ奉リシト云フ」。身長百八十センチと伝えられる吉宗は、生涯怒った表情を見せたことがなかつたといふ。そのうえ、康熙帝と吉宗は、代数・幾何・天文・曆法などへの関心も共通していた。違うのは康熙帝がイエズス会士から知識を吸收したのに対し、キリスト教禁教令もあって吉宗は長崎経由で少しずつ知識を得たことだらう。吉宗は享保五年に禁書令を緩和し、六分儀、天体望遠鏡、工作盤、時計も輸入し、さらに数学者・建部賢弘に『曆算全書』を譲り受けた。時計の実用性にもまして象徴性に価値を見出したようだ。時計が刻む時間はその目的や結果もさることながら、それを計測する器械やその流儀の「プロセス」にむしろ価値があると考えたようだ。技術を結果だけで見るのでなく、それを生み出す基礎科学を重視したのだらう（Yulia Frumer, *Making Time: Astronomical Time*

*Measurement in Tokugawa Japan*. Chicago and London: The University of Chicago Press, 2018, p.71)。

吉宗は、康熙帝はもとよりプロイセンのフリードリッヒ二世（大王）とも同時代人であり、子の家重に將軍位を譲る直前の和蘭風説書（長崎のカピタン情報）から、フリードリッヒ二世のボヘミア侵攻（第二次シュレージエン戦争）とプラハ占領を知つたことだろう、「ドイツの近辺、プロイセン國の主、隣国プラhaarと申す所を切り捕り申し候、然る処、オングレインの國主より、人數を以て右プロイセン國の主を又々取囲み居り候由申し越し候」（延享二年・一七四五年六月廿七日、『和蘭風説書集成』上）。オングレインとはハンガリーのことだ。將軍襲位前から御三家にも伝えられた風説書から、康熙帝の存在を強く意識していたはずだ。「去年北京の帝王え、咬噏吧（カラバ）ことジャガタラ）阿蘭陀人より商売為す使者を遣し、北京に少々阿蘭陀人召し置き申し候所を望み申し候得ども、居所の儀は免し申さず」。ただし康熙帝は、福州でオランダが五年に一回貿易をする」とを許した（貞享四年・一六八七年七月廿日、『和蘭風説書集成』上）。吉宗は、『明律』の和文翻訳や『大清会典』などの収集や研究を命じながら、康熙帝の実像や明清朝の國家構造をつぶさに理解したのではないか（大庭脩『徳川吉宗と康熙帝とフリードリッヒ大王』、BUNGEISHUNJU 2020.2 (404)



〔第一十六回〕 中興の時なり  
武家の困窮をいかに解決するか。  
名君・吉宗の改革は、その一点に因きた。

